

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4070600475		
法人名	吉村興産 株式会社		
事業所名	ふれあいの家 清和苑		
所在地	〒805-0034 福岡県北九州市八幡東区清田2丁目12番7号 Tel 093-654-7010		
自己評価作成日	令和02年02月20日	評価結果確定日	令和02年03月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5番27号	Tel 093-582-0294	
訪問調査日	令和02年03月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

季節ごとに花や野菜を植え、世話から収穫まで入居者とともにやっている。敷地内には天然芝の庭園や東屋などの設備があり、屋外で安心・安全に過ごすことができ、筍や梅・桜など四季折々の季節の移り変わりを肌で感じられる生活をモットーにしている。食事は入居者さんと、メニュー作りから買い物、調理と一緒にできるよう、食材は近隣のスーパーで購入している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「清和苑」は北九州の街並みが一望できる高台に位置し、サービス付き高齢者住宅併設の1ユニット(定員9名)のグループホームである。月2回の提携医療機関による往診と週1回の訪問看護師、介護職員が協力し、利用者の小さな変化も見逃さず早期治療に取り組み、利用者が安心して終末期を迎えられる医療連携体制が整っている。利用者の食べたい物を聞きながら冷蔵庫の中の食材を見て、職員が交代で作る料理を、利用者と職員が談笑しながら、一緒に食べて健康増進に繋げている。畑担当の職員が利用者と一緒に野菜を植えて収穫し、新鮮な野菜を食事に提供している。管理者と職員は、利用者のその人らしさを大切に、ゆとりのある介護に取り組み、毎月発行する「ふれあい通信」を家族に送付し、利用者の生活状況を報告して、家族の安心に繋げ、ホームとの信頼関係が築かれているグループホーム「清和苑」である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 グループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、日常的に戸外へ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	・運営上の方針や目標を掲示している。また、介護スタッフによる介護目標を作り、日々の目標として掲げている。	ホームの介護理念を見やすい場所に掲示し、新人研修や職員会議の中で、理念の確認を行っている。職員一人ひとりが常に理念を意識して、利用者一人ひとりの個性や生活習慣に配慮した「自分らしい生き方」が実現できるよう支援している。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・餅つき等、苑内行事の際に参加を促している。運営推進会議への定期的に地域の方による、「尺八の演奏会」や「マジックショー」「日本舞踊」など公演を行っている。また、毎週園芸や工作などのお手伝いに来苑頂くボランティアの方がいる。	自治会に加入し、回覧板で地域の情報を得て清掃活動に参加出来るように心掛けている。天気の良い日を利用して出かける散歩は、近所の方と挨拶や立ち話をする等、利用者が住み慣れた地域の中で、家族や親しい人達に支えられながら、ホームで暮らせる環境を整えている。	地域の情報を積極的に取り込み、利用者の状態を見ながら、少しずつでも地域行事に参加していく事と、畑や東屋周辺の環境を整備し、地域の方も立ち寄る事が出来る開かれたグループホームとなるような取り組みを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	・運営推進会議にて「認知症」や「介護保険」などを研修として取り入れ、利用者家族や近隣住民の方への理解に繋げている。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	・運営推進会議での意見交換以外にも定期的にアンケートを実施しサービスの向上に努めている。	運営推進会議は、2ヶ月毎に年6回開催し、家族代表、地域包括支援センター職員が出席している。会議の中で、ホームの現状や取り組み、課題、事故等について報告し、参加委員からは、質問や要望等が提案されて話し合い、ホームの運営や業務改善に反映出来るように取り組んでいる。	参加委員の増員を図り、ホームの運営に対して積極的に意見や提案を貰えるような会議の運営を期待したい。
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	北九州市の介護保険課への届出書類は必ず持参するようにしており、電話相談やアポイントが気軽に行える関係が保たれている。	管理者は、行政窓口疑問点や困難事例の相談や空き状況、事故等を報告し、連携を図っている。また、行政の研修や行事に職員が参加し、情報交換を行ったり、運営推進会議に地域包括支援センター職員の参加があり、ホームの現状を伝えている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	・苑内での研修を通じて、職員への意識付けに努めており、身体拘束をしないケアが実践できている。	身体拘束について職員会議や内部研修会の中で、学ぶ機会を設けている。職員は、言葉や薬の抑制も含めた身体拘束が、利用者にとどのような影響を与えるかを理解して、身体拘束をしない介護の実践に取り組んでいる。玄関の鍵は、利用者の心身の状態や、職員の勤務状態に合わせて施錠することもある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	・苑内での研修を通じて、職員の意識を高め、相互監視できる関係性が保たれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	6	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	・必要に応じて制度の利用が提案できるよう、外部の研修に定期的に参加している。開設以来、権利擁護の利用は継続して行っている。	現在、権利擁護の制度を活用している利用者はいないが、制度の重要性は理解している。制度に関する資料やパンフレットを用意し、利用者や家族から相談があれば、いつでも、制度の内容や手続きの方法を説明し、利用者の権利や財産が不利益を被らないように支援している。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	・できる限り家族や入居者の不安に対応できるよう、契約締結の1週間前までに「重要事項と契約説明」の日を設けている。		
10	7	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	・各入居者に担当者を任命している。毎月の御家族への通信を各担当者が作成することにより関係作りに努めている。また、運営推進会議に参加頂き、意見交換に努めている。	職員は、日常会話の中から、利用者の意見や要望を聴き取っている。家族面会時や電話等で、利用者の健康状態、暮らしぶり等を報告し、家族の意見や要望、心配な事を聴き取り、利用者の介護計画やホーム運営に反映出来るように取り組んでいる。	
11	8	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	・管理者は、職員と気軽に話が出来る、意見の出しやすい関係作りに努めている。運営者とは、年に数回、一般職員を交えた食事会を催し、職員との関係を深めるよう努めている。	月1回の職員会議や夜勤明けの10時に、早出、日勤、遅出が揃って行く申し送りの場を利用して、職員に意見や要望を聴いている。年に数回、代表と職員が食事会を行い、直接要望等を表せる機会を設ける等、職員の意欲に繋がるコミュニケーションが図られている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	・賞与時には、努力実績や勤務状況に応じた査定を行い、給与体系も段階別に細かく分け、向上心を持って働ける環境をつくっている。昨年7月にはパート職員も含めた基本給と夜勤手当のベースアップを行った。		
13	9	○人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	・職員採用は、書類選考を行わず、必ず面接を行っている。初任者研修の受講費を支給し、無資格/未経験の採用を推進している。(今年度2名の採用を実施)	職員の採用は、年齢や性別の制限はなく、ヘルパー2級の資格が条件で、採用後は、資格取得のためのバックアップ体制を整えている。また、勤務体制や希望休に柔軟に配慮し、職員がリフレッシュしながら働ける職場環境である。管理者は、職員の能力や特技を把握し、適材適所に役割分担し、働きやすい職場を目指している。	
14	10	○人権教育・啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	・年に1度の研修を実施している。	利用者の人権を守る介護について、職員会議や勉強会の中で話し合い、利用者が、安心して穏やかに過ごせる環境が整備されている。また、言葉遣いや対応に配慮し、あからさまな介護にならないように注意している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	・外部研修に勤務内で参加できるよう勤務態勢を調整し、学ぶ機会を設けている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	・研修に参加し、情報交換の機会を作っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	・入居前の面会やアセスメントを行い、入居開始時からニーズへの対応を準備している。また、入居前には、必ず体験入居(3泊4日から)して頂き、安心できる環境である事を、ご理解頂ける様努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	・入居相談時から入居に至るまで、本人との面談、家族へのアセスメント、契約説明などを行い、現在の生活状況やニーズの聞き取りを行っている。また、体験入居中は、こまめに電話で状況報告を行っている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	・権利擁護、訪問診療、訪問マッサージ、医療系のデイケアなど状況に応じた外部サービスの利用、行政や他事業所の紹介も行っている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	・入居者の得手不得手を把握し、家事やレクで自信を持って活躍できる場面を各々に提供している。職員は生徒側に立つ姿勢を意識して補助を行っている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	・誕生会や外出レクへの参加時には車椅子や歩行の補助を行っていただいている。受診/買い物の同行も可能な限り依頼し、足を運んでいただく機会を増やしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	11	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	・手紙や年賀状の返送、電話や面会時の近況報告を積極的に行っている。	友人、知人等の面会があり、ゆっくり落ち着いて話しが出来る環境を整え、また来て頂けるよう声掛けしている。また、買い物や自宅の周辺、懐かしい場所にドライブに出掛ける等、利用者が長年培ってきた馴染みの関係が継続出来るように取り組んでいる。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	・職員と入居者だけでなく、入居者同士での会話が弾むような話題提供や環境づくりを意識している。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	・退去後も、医療/福祉に係らず、気軽に相談いただけるよう、携帯電話やメールアドレスの交換を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	12	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	・小さなことでも本人に確認することで一人一人のペースと嗜好を最優先にした支援を心掛けている。また、本人意向や希望の把握を全スタッフが出来る様、申し送りや記録を行うことで情報の共有化に努めている。	職員は、利用者と日常会話を通して、思いや意向を聴き取り、職員間で情報を共有し、介護の実践に活かせるように工夫している。利用者の重度化が進み、思いを伝えることが困難な場合は、家族に相談し職員間で話し合い、利用者に寄り添い、その表情や仕草から利用者の思いを汲み取っている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	・生活歴や趣味、好物などは基より、できる限り従前の住居に何うなどし、環境の理解に努めている。過去に介護サービスの利用がある方はケアマネからの情報収集やケアプランの提供を依頼している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	・申し送りや連絡帳等で、各々の健康状態や一日の活動予定の共有に努めている。		
28	13	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	・本人・家族へのニーズや医師からの指導や意見を徴収し、介護計画への反映に留意している。	家族の面会時や電話等で、担当職員が家族とコミュニケーションを取りながら、意見や要望を聴き取り、担当者会議で検討し、利用者本位の介護計画を半年毎に作成している。また、毎月、介護計画の実施状況や目標達成状況を評価し、その結果を踏まえて介護計画の見直しを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	・日々の様子(バイタル、食事量、排泄等)を個別に記録している。共有事項は日誌や連絡帳に記入し、漏れなく申送るよう留意している。ミーティング時には各々の担当者が行ったモニタリングを発表し、話し合いを行っている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	・野外行事や帰宅願望への対応、夜間救急などには個別で対応できるよう、人員配置している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	・経験者の方に、近隣の方主催による「大正琴の教室」を実施した。		
32	14	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	・協力医療機関による訪問診療の案内は行いが、主治医の選択は入居者/家族が決定する。外来受診は家族と日程を話し合いながら双方が協力して行っている。	利用者や家族と話し合い、かかりつけ医と、協力医療機関を選択してもらい、往診体制が整っている協力医療機関の希望が多い。利用者一人ひとりの医療情報を主治医と共有し、訪問看護師の週1回の健康チェックと合わせ、24時間オンコール体制を整え、安心して任せられる医療体制が整っている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	・訪問看護師の訪問日(毎週金曜)には、その日の出勤者が1週間分の気づきや様子を報告している。携帯電話には24時間連絡でき、いつでも相談しやすい体制をとっている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	・入院時は即時病院に行き、連携室や病棟の担当者との情報交換を行っている。リハビリや食事形態など、施設内で行えることを明確にし、早期退院にむけ調整を行っている。		
35	15	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	・重度化や終末期の指針については、入居時に確認し、同意書を作成しているが、状況に応じて、家族や医師と相談し最善の方法を検討している。	契約時に重要事項説明書を基に、利用者や家族にターミナルについて説明し、要望を聴き取り同意を得ている。家族や主治医と連携し、利用者の重度化に合わせて、今後の介護方針を確認し、職員間で方針を共有し、利用者の終末期が安心して過ごせる環境を整備している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	・消防局主催の救命講習を全員に受講させている。		
37	16	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	・年に2回、入居者参加による避難訓練を実施している。地域の方にも呼びかけ訓練への参加を促している。	非常災害を想定した避難訓練を年2回実施し、1回は消防署の参加を得ている。通報装置、消火器の使用方法、非常口、避難経路、避難場所の確認を行い、利用者全員を安全に避難誘導出来る体制を整えている。また、隣接のサービス付き高齢者住宅の職員の協力体制もマニュアルに示し、近隣住民に非常災害時の協力をお願いしている。	非常災害時に備えて、非常食、飲料水、非常用備品(懐中電灯、カセットコンロ等)の備蓄の準備が望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	17	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	・排泄や日常での失敗を周りの方に気づかれないよう対応すること、入居者の前では申し送りを含め、「自分達のこと」を話していると思われないよう気を配っている。居室内の私物は馴染みのものは基より、冷蔵庫や電話、TVなど個人のニーズに合わせた環境づくりを心掛けている。	利用者のプライバシーを尊重する介護について、職員間で話し合い、言葉遣いや対応に注意してトイレ誘導や入浴介助を行い、利用者のプライドや羞恥心に配慮した介護を目指している。また、利用者の個人情報漏洩しないように職員間で周知を図っている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	・自分が欲しいもの、食事のメニューを選択するため、買い物に出掛けている。12月にはバイキング形式のパン屋に行き「食べたいパンを自分で選ぶ」などの取り組みを行った。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	・入居者各々のペースや好みを把握するため参加したアクティビティを記録し、情報を共有している。アクティビティは午前/午後、グループに分けて参加を促している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	・更衣の際の洋服選びの際は本人に確認するようにしている。外出時は特に洋服や装飾品、靴等、化粧などのお洒落を大事にし、時間をかけて準備をお手伝いしている。また、希望する方へはマニキュアを塗り、職員と一緒にネイルアートを楽しんで頂いている。		
42	18	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	・買い物、調理、味見、テーブル拭き、茶碗洗い、茶碗拭きと全員が少しづつお手伝いができるよう分担している。	職員が冷蔵庫の中身を見ながら交代で作る食事を、利用者と職員と一緒に食べる家庭的な食事の時間は、利用者の元気の源になっている。利用者の力の発揮や、他の利用者や職員とコミュニケーションを図る機会として、料理の下拵え等を手伝ってもらったり、白玉団子や干し柿等、簡単なおやつ作りに取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	・各々の食事量、水分量記録し、摂取量の把握に努めている。また、食事の形態や自助具を利用し、時間をかけてでも自分で食べる支援を行っている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	・口腔ケアを毎食後に行い、毎週1回、訪問歯科による口腔ケアを全員が受け、職員が指示・指導を受けることにより口腔内の清潔保持に努めている。		
45	19	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	・排泄記録を行い、一人ひとりの排泄パターンを把握することで適宜声掛け・誘導を行い、トイレでの排泄、おむつの使用減を支援している。	利用者が重度化してもトイレで排泄を基本とし、職員は、利用者一人ひとりの排泄パターンや生活習慣を把握し、タイミングを見ながら声掛けや誘導を行い、失敗の少ないトイレでの排泄支援に取り組んでいる。また、夜間も出来るだけトイレ誘導を行い、利用者の自信回復に繋げる排泄の支援に取り組んでいる。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	・繊維質の多い食事や起床時の水分摂取に取り組んでいる。特に散歩や体操などの軽運動を意識して行っている。		
47	20	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	・入浴は原則、夕方に行っているが、個々のタイミングを見て午前中に行うこともある。入浴回数は要望に応じて週3回～毎日と様々である。	入浴は、利用者の体調に配慮して一日おきに入浴しているが、希望があれば毎日入浴することも可能である。湯船にゆっくり浸かってもらい、職員と談笑しながら楽しい入浴支援に取り組んでいる。また、清拭や足浴に変更する場合もあり、利用者の健康チェックと、清潔保持に努めている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	・消灯や起床時間は、定めていない。日中は本人のADLや体調に応じ、居室での休息を促すよう留意している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	・入居者各々の内服薬の効果、副作用等がいつでも確認できるよう、服薬チェック表とセットでファイリングしている。外用薬についても各々に処方されている薬を症状に応じて何を使用するのか一覧にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	・一人ひとりの趣味、志向が実践できるよう取り組んでいる。 実践例：生け花、編み物、花壇作り、野菜作り、料理、漬物、抹茶、日本舞踊など		
51	21	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	・日常的に散歩、畑・花壇の手入れの為、雨の日以外で戸外に出ない日はない。買い物・美容室・病院など御家族と外出する機会も勧めている。年間を通して、最低でも月一回は外出レクリエーションを企画し、場所の選定時は入居者にも参加して頂いている。	自然が残るホーム周辺の散歩を日課とし、利用者の気分転換を図っている。また、高塔山や金比羅池、夜宮公園等、季節の花を巡るドライブに出かける等、利用者の生きがいに繋がる外出の支援に取り組んでいる。家族の協力を得て外出支援にも取り組んでいる。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	・2～3名の方はスーパーでの買い物や訪問美容室の支払いを自分でやっている。原則、入居者には3千円～5千円程度のお金は持たせて頂くよう御家族にお願いしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	・固定電話や携帯電話の設置を推奨している。操作が分からない、着信に気づかないなどの支援を行っている。知人から届いた年賀状などには自分で出来る限り(名前、絵、写真)の手を加え、返信する支援を行っている。		
54	22	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	・食堂・ホールは天窓からの採光で開放的な雰囲気を作っている。四季を意識した季節ごとの飾りつけや草花を飾り、居心地のよい空間作りに留意している。	室内は、季節の飾りや利用者の写真、家族が面会時に持参される生花を飾り、季節感や生活感に配慮した共用空間である。天窓からの採光で、広い室内は明るく開放感がある。掃除が行き届いた清潔感のあるアットホームな雰囲気の中で、利用者と職員がゲームで盛り上がり、楽しいひと時を過ごしている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	・思い思いの場所で過ごせるよう、菜園、花壇、東屋、談話室、テレビ前にベンチやソファを設置している。		
56	23	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	・入居の調度品は出来る限り使い馴染みの品を使用し、家族や思い出の写真を飾るようにしている。その他、茶碗や箸、湯飲みなども馴染みのものを使用している。	利用者の馴染みの家具や仏壇、身の回りの物や大切な物を家族の協力で持ち込んでもらい、その人らしい居室となるよう配慮し、利用者が安心して穏やかに暮らせる環境を整えている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ・風呂場は暖簾や掲示板を取り付け、居室には写真入りの表札を取り付け、認識し易いように工夫している。		